11 月 14 日のメッセージ

聖書：出エジプト記　6：　2－13

「あなたたちを贖う」

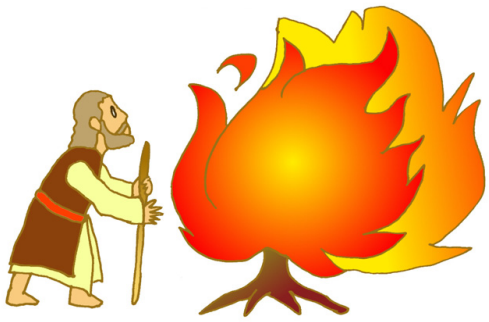
神の約束は確実だとわかっているはずなのに、人間はどうして待つことができないのでしょうか。しるしがあればまだしも、約束を信じて待つことはとても難しいのです。

目の前の労苦に押しつぶされそうになっている耳には、救いの約束の言葉さえ届きません(「モーセは、そのとおりイスラエルの人々に語ったが、彼らは厳しい重労働のため意欲を失って、モーセの言うことを聞こうとはしなかった。」出エジプト記 6:9)。そのような人に向かって救いを語ることはなんと苦しいことでしょう。目の前が真っ暗になっている人に希望を語ることはなんと空しいことでしょう。まして、救いを期待してさえいない人々に語るのは、どれほどの労苦を伴うことでしょう(「モーセは主に訴えた。『御覧のとおり、イスラエルの人々でさえわたしに聞こうとしないのに、どうしてファラオが唇に割礼のないわたしの言うことを聞くでしょうか。』」出エジプト記 6:12)。

しかし、モーセはその道を選んでいきました。ファラオの王女の子として歩んでいればする必要の無かった労苦です。イスラエルのことなど知らないと言えば、背負わずに済んだ責任です。それでも彼は、目の前の安心よりも未来永劫の安心を求めて立ち上がりました(「キリストのゆえに受けるあざけりをエジプトの財宝よりまさる富と考えました。与えられる報いに目を向けていたからです。」ヘブライ人への手紙 11:26)。自分一人のためではなく、全ての人の救いを求めたからです。だから、厳しいとわかっていても一歩を踏み出したのです。神と共にその全てを背負って、信仰の道を歩んだのです(「信仰によって、モーセは王の怒りを恐れず、エジプトを立ち去りました。目に見えない方を見ているようにして、耐え忍んでいたからです。」ヘブライ人への手紙 11:27)。

モーセを支えたのは神の御業への思いでした(「わたしは主の御業を思い続け／いにしえに、あなたのなさった奇跡を思い続け／あなたの働きをひとつひとつ口ずさみながら／あなたの御業を思いめぐらします。」詩編 77:12-13)。

ホレブの山で招かれた時から、モーセは神の助けの中にある自分に気づいていました。そして、神は信じる者を決して見捨てられません。モーセが壁にぶつかるたびに、様々な方法で「腕を伸ばし」(「それゆえ、イスラエルの人々に言いなさい。わたしは主である。わたしはエジプトの重労働の下からあなたたちを導き出し、奴隷の身分から救い出す。腕を伸ばし、大いなる審判によってあなたたちを贖う。」出エジプト記 6:6)、救いの手を差し伸べられ、最後までモーセと共に歩まれます。

その約束は、モーセばかりでなく、神に従う道を選んだ全ての弟子たちにも果たされました(「また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。」マルコによる福音書 13:13)。

今、モーセの歩んだ道に、弟子たちの歩んだ道に、その働きに私たちも招かれています。目には見えませんが神は確かに私たちと共におられます。そして、「あなたたちを贖う」という先達との約束を神は違えられることはありません。だから、私たちは今日も約束を信じて待ち続けることができるのです。